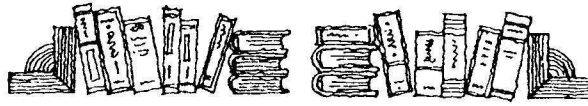


国語国文学会だより



No. 20

1998. 11

日本文学科卒業生の会

国語国文学会 秋季大会・公開講演会のご案内

平成十年度の秋季大会（研究発表会・公開講演会）を、左記のように開催いたします。
ご多忙の折りかと存じますが、お誘い合わせの上ご出席くださいますよう、ご案内申し上げます。
会員以外の方々のご参加も歓迎いたします。

日時・平成十年十一月二十一日（土）

場所・（午前、午後とも）八〇年館 八五一教室

【午前の部】研究発表会

八〇年館 八五一教室

（午前十時～十二時十分）

(1) 大和物語一五三段の贈答について

本学非常勤講師・院21回 成島 知子氏

(2) 三島由紀夫の初期短編について

茨城女子短大助教授・新28回 小林 和子氏

(3) 外来語省略形の語構成

―音にみられる「同化」についての考考―

本学助手・新44回 佐野 江美氏

【午後の部】総会・公開講演会

八〇年館八五一教室

（午後一時～四時十五分）

*開会のことば

*学科長挨拶

(1) 近代日本語の録音資料あれこれ

源 五郎先生

休憩

(2) 私は何を書いてきたか

二兎社 劇作家・演出家 永井 愛氏

*閉会のことば

（卒業生委員）

懇親会のご案内

秋季大会終了後、生協食堂ウイミンにおいて、永井愛氏、先生方、在学生を交えて交流のひとつときを過ごしたいと思います。

多くの会員の皆さまのご出席を、お待ちしております。

上げております。

なお、同封の葉書で出欠をご連絡ください。

時・午後四時三十分～六時十五分

場所・生協食堂ウイミン（七〇年館一階左手）

会費・卒業生 三千元

在学生 千五百円

（会費は当日大会会場にて頂きます）

*出欠席はがき締切り 十一月十七日

永井 愛氏のご紹介

プレスリリースを中心に

二兎社は一九八一年、永井愛氏と大石静氏（現・脚本家）によって設立。それぞれの作品を上演してきた。一九九一年、大石氏の退団後は永井氏の作・演出作品をプロデュースする劇団として活動中。社会状況、人間の深層から目をそらさず、社会批評性を持ちながら、笑いに弾んで展開する二兎社の芝居は、幅広い観客の共感を得ている。

一九九四年から三年間にわたって完成された「戦後生活史劇三部作」は、転換期の人々を生活の現場から描き、すぐれた日本人論として高く評価された。その第一部が「時の物置」（一九九四年初演）。テレビが初めて家に来た日のこと、おばさんたちの無尽講、呼出し電話、にぎやかな近所づきあい……東京オリンピックに向けて日本中が沸き立っていた一九六〇年代初頭の話。

第二部「パパのデモクラシー」（一九九五年初演）は、第二次大戦後、軍国主義から民主主義への転換がもたらした混乱を、神主一家とそこに住み着いた人々を通して活写し、文化庁芸術祭大賞を二兎社が受賞。第三部「僕の東京日記」（一九九六年初演）は、一九七〇

年代、若者の反乱の終焉をアパートの猫騒動を通して描き、永井氏が紀伊国屋演劇賞個人賞を受賞する。

昨年、永井氏は他劇団に二作品を書き下ろした。劇団青年座への「見よ、飛行機の高く飛べるを」は、明治末期の女子師範学校が舞台、良妻賢母教育に反対してストライキを決定する少女たちの物語は大きな感動を呼び、文化庁芸術祭大賞を青年座が受賞。テアトルエコーへの「ら抜き殺意」（演出も）は、「ら抜き言葉」「コギャル語」「過剰な敬語表現」など、現代日本の話し言葉をめぐる喜劇で、第一回鶴屋南北戯曲賞を受賞。またこの二作によって、平成九年度芸術選奨文部大臣新人賞を永井氏は受賞するなど、今日最も注目されている劇作家である。

一九五一年東京生まれ。桐朋学園大学演劇専攻科卒。一九八一年、大石静氏とともに二兎社を旗揚げ、一九九一年より同社代表。

二兎社での作・演出作品（右記以外の）

「私もカメラく黒髪先生事件報告」
「カズオ」「ヒロスケく哀しみの柿の木」
「転職日記」
「あなたと別れたい」
「空の耳」
Big meを探せ」
「帰ってこない」他

◆永井愛氏のこと――

愛ちゃんは附属高校演劇部のコーチ

脚本家 大石 静氏

愛ちゃんは日本女子大学附属高校の演劇部を、長いこと指導してくれていたんですよ。のびのびとした西生田の高校生を「女子大つていうと、その附属校つていうと何か先入観があつたんだけど、女子だけの学校つて、自分達で何でもやろうという自立心があつて、清々しいし、のびのびとしていてすごく好き」つて、私によく言ってくれていました。

今は指導こそしていませんが、愛ちゃんは西生田での部活の思い出を忘れていないと思います。

附属でお話を聞いたこと

新40回（国）

「時の物置」を拝見して、「眠る記憶をひっぱり出」して、永井さんが書きたかったものが、よくわかりました。私も、永井さんと大石さんが附属高校でお話をしてくださった日のこと、一つのことを打ち込んでおられる方のお話の深さ、楽しいお二人のやりとりを、思い出しています。

清水 康行氏のご紹介

清水康行氏は、平成三年度に名古屋大学から本学に移られ、文学部日本文学科および大学院文学研究科において、日本語学の諸科目を担当しております。また、現在本学大学院日本文学専攻主任の役職も兼務され、本学の運営面でもご活躍です。

ご専門は現代日本語の源である近代日本語の研究で、幕末・明治期のことを中心に、音韻の問題や文体の問題を、実証的に研究しておられます。従来の日本語史の研究は古代偏重、文献重視の傾向が強く、近代は手薄で、話し言葉となると、実態はよくわかっておりませんでした。氏は、録音資料や速記本などを資料として、すぐれた成果をあげられ、この分野を第一線に立つて開拓されてこられました。

今回のご講演では、まさにこの近代の録音資料の世界について、お話しくださいますので、まだ日本語史の教科書に載っていない専門の知見を披露いただけることと期待されます。また、歴史上の人物の肉声をご紹介します。くださること、どなたにも興味深い講演になることでしょう。

(文学部日本文学科助教授 藤原浩史)

略歴

一九七六年 東京大学文学部卒業

一九七九年 東京大学大学院人文科学研究所修士課程修了

一九八一年 同博士課程中退

一九八一年～一九八六年 鶴見大学文学部専任講師・助教授

一九八六年～一九九一年 名古屋大学教養部助教授

一九九一年～現在 日本女子大学文学部助教授・教授

主な著書

○日本語の表現と理解 (共編著 放送大学教育振興会)

○日本語表現法 (放送大学教育振興会)

○国語学 (分担執筆 学術図書出版社)

○日本の言語文化 (分担執筆 放送大学教育振興会)

○日本語学概論 (分担執筆 放送大学教育振興会)

○東京語のゆくえ (分担執筆 東京堂出版)

○日本の文学とことば (共編・分担執筆 東京堂出版)

現代社会への痛快な一石

新40回(住)

「時の物置」の重要なモチーフ、テレビ。今どこの家にも、しかも一家に何台もあるテレビが、あんなに貴重品だった時代。便利さに馴れすぎた現代社会への痛切な一石だと思いました。しかも喜劇仕立てだけに、残った思いは強烈です。考えてみると、そんなに古い昔ではないですよ。

◆研究発表では――

「大和物語一五三段の贈答について」成島知子氏は、平城天皇と皇太弟・嵯峨天皇の贈答に歌い込まれた藤袴の捉え方について、両者の違いに注目して論証する。

「三島由紀夫の初期短編について」小林和子氏は従来見落とされがちの『軽王子』『衣通姫』の位置づけを考える。

「外来語省略形の語構成―音に見られる「同化」についての考察―」佐野江美氏は、外来語が再生産している略語、「プロ(フェッショナル)」「ワー(ド)プロ(セツサー)」などについて、省略された音と略語を形成する音の性格を明らかにしそこに見られる日本語(和語・漢語)の音の影響を検討する。

など、興味深い研究発表が続きます。

情報コーナー

中原中也記念館、「中原中也の会」

平成六年二月、生家跡に、中也の詩風にぴったりのモダンな記念館ができました。成瀬先生ご生誕の吉敷市の隣町で、中也のお墓も吉敷にあります。平成八年九月発足の「中原中也の会」は、中也とその作品について理解を深めるための場で、現在会員四百余名、山口での総会（九月）、東京研究会（五月）、文学散歩（適時）、研究誌「中原中也研究」の刊行といった活動を行っています。

過去三回の総会には講演者に秋山駿、江藤淳、粟津則雄の各氏をお迎えしました。会員でなくても参加できますので、興味があればぜひ、是非お問い合わせください。記念館または高橋順子（新28・院18 電話〇三―三三二二〇―九一八〇）まで。

中原中也記念館

〒七五三―〇〇五六 山口市湯田温泉一―一―一二一 〇八三九―三二―六四三〇

*高橋順子氏は「中原中也の会」理事を務めておいでです。

会員の著作

『青鞥』を読む 新・フェミニズム批評の会編

本学とゆかりの深い『青鞥』とはどんな雑誌であったかを検証。渡辺澄子、岩淵宏子、藤木直実各氏が分章執筆。四六判上製・五百頁

学藝書林 〇三―三五五二―五九〇六

定価 三一四三円＋税

虹二重 綾野道江句集

昭和五十九年から平成九年まで、十五年間の句を収録した『父の絵』につづく氏の第二集。

この三月、日本女子大学附属高等学校を定年退職された氏が「一つの区切り」の思いをこめて自選された私家版。

風神社

能へのご案内

大倉七左衛門宣利二十三回忌追善会が十一月二十三日（祝日）、国立能楽堂において大倉三忠氏により開かれます。旧尾張藩徳川家御能役者太鼓役大倉流大倉七左衛門家十五代目の追善の会とあつて、各派宗家による演目が並び、舞囃子、狂言「泣尼」大蔵弥右衛門、能「楊貴妃」宝生閑、大倉三忠、大倉源次郎。

入場料 一万三千円（正面指定席）、一万円（自

由席）のところ、国語国文学会会員に限り、大倉家のご厚意により半額にしてください。

お申込み 関口美登里氏（旧姓大倉・新6）へ

〇四八―四六四―七六四五

*なお自主ゼミ「古代中世文化論」では、現在『梁塵秘抄』を読んでいます。中世芸能に関心がある方、どうぞ、ご参加ください。

山田佐和子 〇三―三九七二―四八四三

皆様よりの情報をお待ちします!!

お願いとお詫び

会費の納入について

これまで、国語国文学会は同窓生の会ということで、会費未納の方にも、退会のお申出がない限り、案内をお送りしておりましたが、今年度より、会費未納が二年間にわたる方々には、案内の送付を一旦中断することに致しました。経費の節約を計るためにも、決断せざるを得ず、どうぞご理解ください。

また、『たより』が大幅に遅れましたことを、お詫び申し上げます。

国語国文学会だより

・発行日 一九九八年十一月九日

・発行者 日本女子大学国語国文学会

卒業生の会